〔書　評〕

『平安時代訓點本論考　研究篇』

築島裕著

石塚晴通

本書の如き著作を本當の意味での勞作・大著といふのであらう。自ら調査した平安時代の訓點本、三三五五點に基く實證的研究である。無論、史的展望や諸寺經藏の悉皆調査に伴つて調査した鎌倉・室町・江戸時代の訓點本も數千點に上る筈である。

本書の内容を示す爲に目次を掲げると、次の通りである。

目次

口繪
築島裕藏辨正論卷第三保安四年點（卷尾）
築島裕藏大毗盧遮那成佛經疏卷第十六・卷第十七寬治二年點（卷首）・永承元年點（卷尾）
自序
凡例
序論——平安時代訓點本研究の回顧と本書の意圖
第一部平安時代訓點本の傳存狀態
第一章總説
第一節平安時代訓點本の現存點數
第二節ヲコト點から見た諸寺經藏本の性格
第三節佛寺に傳存する漢籍佛典の古訓點本
第四節畿内以外の地域における平安時代訓點本
第二章石山寺經藏における平安時代訓點本
第一節總説
第二節一切經藏本・校倉聖教藏本の内容
第三節一切經藏本と校倉聖教藏本との全體的構成についての比較
第四節深密藏本の性格と概要
第三章醍醐寺經藏における平安時代訓點本
第四章高山寺經藏における平安時代訓點本
第五章東寺觀智院金剛藏における平安時代訓點本
第六章中川成身院本について
第二部ヲコト點の種別による訓點資料の分類
第一章總説
第二章南都古宗に起源を有するヲコト點

第一節特殊點甲類
第二節特殊點乙類
第三節第二群點
第四節第一群點　附水尾點・妙法院點・甲點圖
第五節第三群點
第六節第四群點
第七節第六群點
第八節喜多院點
第九節東大寺點
第三章天台宗に起源を有するヲコト點
第一節總說
第二節第五群點　附智證大師點
第三節乙點圖
第四節西墓點
第五節仁都波迦點
第六節叡山點
第七節禪林寺點
第八節天仁波流點・天爾波留點（別流）
第九節香隆寺點
第十節寶幢院點
第十一節池上阿闍梨點
第十二節遍照寺點
第四章眞言宗に起源を有するヲコト點
第一節總說
第二節順曉和尙點
第三節中院僧正點
第四節圓堂點
第五節淨光房點
第六節東南院點
第七節廣隆寺點
第五章俗家に使用されたヲコト點
第一節總說
第二節古紀傳點（丙點圖）
第三節經傳
第四節紀傳　附法家點
第六章假名點本の性格
第三部佛書における訓說の傳承
第一章總說
第二章明詮大僧都の訓說の傳承
第三章成唯識論の古訓法の傳流
第四章大日經の古訓法の傳流
第五章大日經疏の古訓法の傳流
第六章角筆點から毛筆點への移點
圖錄篇追補
圖錄篇正誤表
索引

既發表論文一覽

あとがき

右の目次より知られる如く、本書のテーマはヲコト點の分類を手懸りとする訓點資料の傳存と訓說傳承とを中心とする研究である。著者には既に、『平安時代の漢文訓讀語に就きての研究』(昭和三十九年三月、東京大學出版會)に於て平安時代の訓點語、特に語彙・訓法を中心とする優れた大著があり、また『大慈恩寺三藏法師傳の國語學的研究　譯文篇・索引篇・研究篇』(一九六五年三月、一九六六年三月、一九六七年三月、東京大學出版會)といふ大部な院政期訓點資料の綜合的研究書があり、また『平安時代語新論』(一九六九年六月、東京大學出版會)といふ漢文訓讀語を取り込んだ高度な平安時代語の概論書があり、一貫した平安時代訓點語と訓點資料の研究の積み重ねの上に更に右に述べた二つのテーマに絞つた大著を公けにされたわけである。改めて其の足跡に敬意を表さずにはゐられない。

本書の序論(三頁)に、今日までの訓點語研究の趨勢として

一、研究對象の文獻が、平安時代初期中心から、平安時代全般、更に鎌倉時代以後にまで、範圍が擴大された。

二、訓點資料の中から口語の資料を發掘しようとする試みから、訓點資料自體の内部に、口語と文語との兩要素が含まれてゐるとの認識が深められ、その複雜な性格の分析に努力が拂はれるやうになつた。

三、訓點資料内部に存するところの、學問上の流派による、學說・訓法の相違や對立と、その國語史上における位置附けについての關心が注がれる段階に及んで來た。

の三點を擧げてゐるが、これは著者を中心として推進されたことである。更には、昭和二十九年に設立された訓點語學會の果した役割を大きく評價してゐるが、著者自身が創立以來の會員であり、同會の現會長でもある。以て著者の此の研究分野に於ける貢獻度が明らかである。但し、著者は謙虛にも本書の特長を、中田祝夫博士『古點本の國語學的研究　總論篇』(以下、「點研」ト略稱スル)の方法に則りながら中田博士の論及しなかつた學派による複數の訓說の傳承と古寺經藏訓點資料の傳存狀態との分析であるとしてゐる。これらは、著者自らが發展途上の研究と位置づけてをり(一九頁)、新資料の發掘に努力する一方で、右の二點に絞つて體系的記述を試みた、大いなる意欲作である。

二つのテーマの内では、訓點資料の傳存狀態の分析が第一部に配されてゐる。諸寺經藏の綜合調査・悉皆調査を踏まへての立論であり、說得力の有るものとなつてゐる。中田博士「點研」に於て取上げられた訓點資料約九百點は、一九五四年當時としては畫期的なものであつたが、本書が一九九五年一月二十二日現在として取上げてゐる訓點資料は三三五五點に上り、更に古寺經藏の悉皆調査を踏まへて立論してゐることが一大特長となつてゐる。自らが代表者として推進してゐる高山寺・石山寺經藏の綜合調査に基く分析が特に詳しく、長年主力メムバーとして參加してゐる醍醐寺・東寺觀智院金剛藏の綜合調査に基く分析も詳しい。章を改

めての分析はなされてゐないが、これも主力メムバーとして参加してゐる仁和寺・大覺寺・三千院・青蓮院・隨心院の綜合調査に基く記述は隨所に見られ、全貌が明らかではないとしながらも高野山藏書にも全體的目配りを怠つてゐない。諸寺の經藏を二大別して、概して天台宗は其の宗派の聖教を中心として別の宗派のものはあまり含まない「純粹派」であり、眞言宗でも仁和寺はこの類であり、これに對して眞言宗の多くは其の宗派の聖教ばかりでなく他の流派の聖教類も併せ收めた「合糅派」であるとする分析は、綜合調査・悉皆調査を踏まへて始めて明らかとなつたことである。眞言宗諸經藏に比して天台宗諸經藏の平安時代訓點資料自體が少ない懸念は有るが、大筋として動かないところであらう。また、ヲコト點の分類を中心として諸經藏の平安時代訓點資料の實態が明らかとなつたことも一大成果である。ただし、中世の寺院が諸學の據り所として、經藏は一種の學藝複合構造體として果した役割も大きく、その段階で取込まれた典籍・聖教が有ることも考慮する必要が有るのではなからうか。

今後、高野山諸經藏等の綜合調査・悉皆調査が進展し、また高山寺・石山寺經藏以外の諸經藏聖教類についても此の二經藏竝みの緻密な調査がなされること等により、平安時代訓點資料の點數は相當に增すことも豫想されるが、平安時代訓點資料の實態が本書により明らかになつた意義は極めて大きい。

第二部がヲコト點の種別による訓點資料の分類となつてをり、このヲコト點の研究を有力な手段として第一部の訓點資料の傳存狀態の分析もなされ、また第三部の佛書に於ける訓說傳承の分析もなされる構成となつてゐる。多くの訓點本を調査し、ヲコト點を八群に分類して體系的記述をなし得た中田博士「點研」を大いに稱揚しつつ、更に中田博士に數倍する訓點本を調査し、大局的體系性と個々の資料性とを考慮して展開する六百頁のヲコト點論は壓卷である。第一群點から第八群點まで及び其れに屬さない特殊點の分類と名稱とを中田博士「點研」によりつつも（但シ、第七群點、第八群點ノ呼稱ハ本書デハ用ヰラレテヰナイ）、本書では起源を南都古宗・天台宗・眞言宗にあるものと三種に大別して、俗家に使用されたヲコト點に說き及んでゐる。ヲコト點の機能よりすれば、妥當な立場である。本書では、ヲコト點の發達の過程を追求することが重要視され、記述は形式的に流れない。例へば、南都古宗に起源を有するヲコト點を說くに當り、成立段階の古い順に、特殊點を甲と乙とに分ち、次に第二群點、第一群點、第三群點、第四群點、第六群點、喜多院點、東大寺點と說き及んで行く。南都古宗に發したヲコト點が、やがて天台宗延曆寺に及んで發達を遂げ大學の博士にまで及び、寺門園城寺も獨特の定着の仕方をし、眞言宗は十世紀になつて天台宗の影響を受けてヲコト點を發達させたことを、個々の訓點本の調査を踏まへて實證してゐる。必ずしも天台宗經藏に惠まれてゐるとは言ひ得ない中で、資料の博搜により右の到達をなし遂げてゐることは見事である。中田博士「點研」で未發見とされた東南院點・天仁波流點・遍照寺點・香隆寺

點・乙點圖・禪林寺點・叡山點は、本書に使用された訓點本が具體的に示されてゐる。また、同じく未發見とされた忍辱山點・丙點圖・三寶嶽寺點も、本書でそれぞれ喜多院點・古紀傳點・寶幢院點と同一のものとされてゐる。

ヲコト點の使用者の追究は、當然のことながら師資相承を明らかにして、各宗派の相承血脈を明らかにして行く。本書のヲコト點研究が、佛教史學等にも多大に貢獻してゐるものと思はれる。

これだけ壯大なヲコト點論であるだけに、前に著者の『平安時代語新論』に若干觸れられてゐるとは言へ、ヲコト點の起源について改めて說いて欲しかつたと思はれる。漢文に加點すること自體は、漢字文化圈に共通な中で、ヲコト點の如きものを發達させたのは日本語に於てのみであり、しかも平安時代を中心とする方法であるので、特殊點甲・乙の分析を通したヲコト點の起源論を望ましく思ふのである。また聊か細かいことで恐縮であるが、第三章五二一頁の第五群點で取上げられてゐる日本書紀卷第廿二・廿四（文化廳藏・舊岩崎本）の(C)第四次點と(c')第五次點とは、大多數が判別不能としてゐるが、返點等一部を除いて墨色・形態から一應の區別はつけ得るので、機會を得て評者の判定を示したく思つてゐる。

第三部は、佛書に於ける訓說の傳承を扱ふ。ヲコト點の使用に伴ふ師資相承と共に、訓點の年代的重層性がもう一つの大きなテーマである。具體的には、明詮大僧都の訓說、成唯識論・大日經・大日經疏の訓點を取り上げてゐる。訓點の系統を說くことに比して、訓點の年代性を說くことの困難さは、評者自身日本書紀古訓の分析を通して體驗してゐるので、大いに興味を抱いてゐるが、やはり一筋縄では行かない。本書の如く多大な資料を集めた上でも歸納的に年代性が明らかになるとは言へず、學習の結果としての訓點の性格を考へて、個々の資料毎に愼重に考へて行くより仕方なささうである。尙、第六章に於て、角點の傳承を扱つてゐるが、角點が特殊視され、また小林芳規博士のみが扱つてゐる傾向の有る中で、訓點資料全體の中に角點を位置づけ、角點から毛筆點への改點を訓說傳承の問題として說いてゐることは、大いに評價して良いことと思はれる。

最後に、圖錄篇追補・正誤表が附されてゐる。本書に先立つ昭和六十一年十月に刊行された『平安時代訓點本論考 ヲコト點圖 假名字體表』（汲古書院）の追補・正誤表であるが、著者の十年餘に亙る不斷の精進を示すものである。本書の第二部第五章八八〇頁の記述とも關聯するが、日本書紀卷第廿二～卅（北野天滿宮本）の古點を、院政期點から鎌倉初期點に變更したこと（三八一）等、大いに勇氣の要ることである。その面では、本書の第二部第三章五一八頁の淨名玄論卷第一（京都國立博物館藏、神田喜一郎博士舊藏）を慶雲三年の書寫としてゐるのは誤りで、この卷は平安初期の書寫であり、圖錄篇の方もそのやうに訂正すべきである。各研究者が、ささやかな各々の資料の調査の中で氣づいた箇所を、聊かの勇氣を以て著者

に報せ、この學界共有の大著を更に良きものにして行くべきである。

本書の體裁は、堅實でなかなかに格調高く内容に相應しいものである。學術書も殆どがコンピュータ整版になりつつある中で、曾て活版が獲得した學術書の格調は急速に失はれてをり、今後は本書の如きを手本として何とか工夫して行くべきものと考へる（因みに本書は、コンピュータ整版である）。

本書の著者には、御自愛の上、更になし遂げて戴きたきことがある。曾て漢文訓讀語彙と和文語彙との對比を鮮烈に證明して、音韻や文法に比べて遲れてゐた語彙の研究に一大基礎を築かれた著者には、是非とも漢文訓讀語彙の集大成を望みたい。本書で示された如く、多大な訓點本の調査で得られた用例語彙の蓄積は、餘人には到底に望み難く、既に三十萬例を超す著者の手許の用例を、學界共有の財産となるべく集大成されることを切に願ふものである。

（一九九六年五月三十一日発行　汲古書院刊　A5判　一一九二頁　本体価格二五〇〇〇円）

――北海道大學大學院教授――

（二〇〇〇年四月三日　受理）